

氏名	安田 純子
学位の種類	博士（事業構想学）
学位記番号	第7号
学位授与年月日	平成27年3月19日
学位授与の条件	学位規程第3条第3項該当
学位論文題目	社会的マイノリティと観光のカーオーストラリアにおけるアボリジニの社会参入と観光—
論文審査委員	主査 宮原 育子 副査 徳永 幸之, 富樫 敦, 蒔苗 耕司

## 論文の要旨

観光は、観光する側においても観光される側においても、経済的側面だけでなく社会や人を変えていく力を持っている。本論文では、社会的マイノリティと考えられているオーストラリア先住民アボリジニを事例として、彼らがおかれている現状を明らかにし、近年その生活文化が国内外から重要な観光資源と認知されつつあることを背景に、アボリジニが主体となった観光の取り組みによる経済的・社会的自立への可能性と文化継承など、持続可能な観光事業について考察する。

アボリジニのくびとは、同化政策等による「失われた世代」\*への和解後市民としての権利を得て、オーストラリア政府からオーストラリア人として最低限の生活をする権利が与えられ、保障が受けられるようになった。しかし、現代においてもその多くがまだ社会的には低層に位置づけられており、経済状態の低さはその要因の一つと考えられる。

アボリジニ観光は、本物という意味ではアボリジニしかできない産業である。観光が盛んになっている現代において、彼らの伝統文化を観光資源として考えると、それはビジネス効果が見込まれ、高い失業率や経済的地位の低さの改善と経済的自立に役立ち、文化継承にも役立つと考えられる。資本主義社会において経済力がつけば、社会的地位も向上し、差別されない“真のオーストラリア人”となることが可能となるだろう。そして、現代社会に主体的・積極的に関与できる“市民”として参入することにもなると考える。また観光によって、“人”としての存在がアピールされて社会の認識が高まれば、独自の文化が「同化・包摂」や「排除」から護られ、後世にも伝え残していくことが可能になると考える。

オーストラリア政府は、観光推進の一策として2004年に先住民観光ビジネス準備プログラム（Indigenous Tourism Business Ready Program）を発足させた。観光においては、1980年代半ばから自然に注目したエコツーリズムと多文化社会（マルチカルチュラル）に付随したエスニック・ツーリズムが多く行われている。アボリジニ観光はこれらの融合により自然面や文化面の多面性をもった複合型の観光を形成することができる。また、アボリジニ観光は、時代の要求に即し、注目されてきたコミュニティ・ベースド・ツーリズムの代表例の一つとも言える。国際社会においてアボリジニ美術の価値が高まったのと同様に、アボリジニ観光は、さまざまな分野に発展する可能性を秘め、今後更なる広がりを見せていこう。

マイノリティと言われる先住民の状況は地域的にも歴史的にも多様ではあるが、“人間の根源”に関わる普遍的な何か（人類の根底にある普遍性）を残しており、それは殺伐とした

現代社会の人間を魅了している。この数十年の間に彼らを取り巻く社会的環境が大きく変化してきて、彼らの生活も変化を余儀なくされている。彼らのユニークな文化資源は、彼らのおかれている状況の改善に資するものであり、彼らがその変化を能動的に受け入れるために、“観光”はその力を発揮できると考える。伝統的文化や環境が破壊されるのではないかというような懸念があり、注意を要することでもあるが、観光は、マイノリティとしての彼らが主流社会の経済的・社会的負荷として見られてきた存在から、独自の文化資本を持つ大きな存在となるための力として、重要な役割を果たすものと言えるだろう。

\* ヨーロッパ人とアボリジニの混血児は、白人社会への同化が可能と見なされ、強制的に親から引き離されて施設に収容されたり、白人家庭で育てられたりした。彼らのことを「失われた世代」(lost generation) または「盗まれた世代」(stolen generation) という。政府の政策によって1970年まで行われていた。

## 審査結果の要旨

本論文は、『社会的マイノリティと観光の力』と題して、オーストラリアにおけるアボリジニの社会参入と観光について論じたものである。

オーストラリア先住民アボリジニは、白人が入植してきた1788年以降長い間苦難の日々を強いられ、1967年まで国勢調査の対象となることはなく、オーストラリア市民となったのは同年に行われた国民投票後である。以上のもと、本論文ではアボリジニがおかれている背景と課題を明らかにし、経済的自立と文化継承などを目的に、彼らの文化を観光資源とし、アボリジニ自らが主体となって行う観光について考察した。観光を媒介として彼らの文化は観光者に見られるモノとして提示される一方、観光は彼らの文化を知らせ、存在を示す機会ともなり得ることを示した。

博士論文は、第1章の序論から第8章の結論までの8章構成であり、論文を構成する核となる部分は、日本学術会議協力学術研究団体として認定された学会の論文誌掲載論文（複数査読付き）、大学紀要掲載論文（複数査読付き）、並びに学会編纂の専門出版本掲載論文に基づいている。

第1章は序論であり、研究の背景としてオーストラリア先住民アボリジニの現状の問題点と課題をまとめ、本研究の目的および調査研究方法について述べている。

第2章では、観光の力、学問としての観光を取り上げ、観光の持つ意味・魅力、観光する側・される側、人間性を回復させる観光について述べている。

第3章では、アボリジニに関する背景や既存研究についてまとめている。前段で先住民全体に共通する社会的マイノリティに触れた後、アボリジニやアボリジニ観光に関する従来研究を述べ考察・議論を加えている。

第4章では、アボリジニについて多岐に渡る視点から議論を加えている。前半では先住民アボリジニの歴史的背景を踏まえアボリジニ文化と政策の変遷をまとめている。後半では、アボリジニ社会の生活と文化を詳述し、アボリジニ社会の課題を掘り下げて議論している。

第5章と第6章は「観光」を取りあげ、5章でのオーストラリア政府の観光の考え方・取り組み・観光政策を踏まえ、第6章ではアボリジニが主体となれる産業労働としてのアボリジニ観光について、議論及び新たな提案を行っている。

第7章はアボリジニ観光の効果と問題点について考察し、論文全体のまとめを第8章の結論で行い、経済的自立と文化継承を目的に、彼らの文化を観光資源とし、アボリジニ自らが主体となって行う観光について展望している。

以上、本論文は、観光が社会や人を変えていく力を持っていることを述べ、社会的マイノリティと考えられるオーストラリア先住民アボリジニを事例として、彼らがおかれている背景を明らかにし、経済的自立と文化継承などを目的に、その文化を観光資源とする持続可能

**博士論文要旨・審査結果要旨  
学外公表用様式**

な観光事業について論じた論文であり、学位論文として十分な新規性、有効性等を有するものであるとともに、事業構想学の発展に寄与するところが少なくない。  
よって博士（事業構想学）の学位論文として合格と認める。